

# 生駒検定＜全国版＞

## ＜問18＞ 生駒に「桃源郷」があった！

江戸時代前期を代表する諸学問の学者であった貝原益軒は紀行家でもあり、その紀行文の1つに「諸州めぐり南遊紀行」があります。この中で、益軒は要約すると次のように記しています。

元禄2（1689）年、京を出発。山城・河内の国境たる洞ヶ峠を通り、河内の国私市を経て、文字通り天上の天の川のごとく白砂の川原が続く天の川（天野川）を遡り、船形の巨岩が横たわる奇境なる岩船（磐船）に至る。そして、その岩船から続く数百mの山峡を抜けると、大きい谷に広がる里に出た。ここは田原といい、その中央を流れる天の川の東を東田原といい大和の国で、川の西を西田原といい河内の国であるが、この山間の幽谷の中なる田原の里は、あたかも、「桃花源記」とうかがんきで描かれた、兩岸に桃の花の林が続く川を遡ってたどり着いた川の源の山の向こうにあった理想郷（桃源郷）のようである。



このように貝原益軒は、東田原（現生駒市北田原町）と西田原（現四条畷市の下田原）はあたかも桃源郷のようであると賛美していますが、それでは、桃源郷の由来をなす「桃花源記」を著した中国六朝りくちょう時代を代表する文学者はだれでしょう。次から選んでください。

白居易 杜甫 李白 陶淵明

## ＜問19＞ 仏教芸術（建築・絵画）

NHKの街歩き番組といえば「ブラタモリ」。15(H27)年7月4日に放映されたのは、第4シリーズの「#11 奈良の宝 ～観光地・奈良はどう守られた？～ ＜テーマ「文化財の守り方」＞」でした。

この街歩きの中でタモリさんと絶妙のコンビぶりを発揮して人気を急上昇させた桑子アナウンサーと共に、この回ではタモリさんは、奈良時代に建立された大仏殿と大仏の1300年間のいくたびかの修復・再建の工夫・苦心のあとを探索・探査した後、大仏建立と同時代に聖武天皇の勅願により行基が開創したと伝えられる、生駒市俵口町にある真言律宗のお寺を訪れました。

このお寺の本堂は鎌倉時代に建てられた重要文化財で、2012年9月から2016年秋完了の予定で全面解体し組み直す大規模な修理工事が行われています。この修理現場に潜入したタモリさんは、宮大工（何と県庁職員！）に弟子入りし、カンナがけの技を磨き、その腕を認められたタモリさんは、修理を終えた2つの木材の結合部を固定するための込栓（こみせん）を打ち込ませてもらいました。その込栓はそのまま次の修復までの200～300年、「タモリが修理した痕跡」として生き続けます。タモリさんいわく「（もう）他人ひとの寺って感じしないよね！」。タモリさんは、今回、重要文化財では初めて導入された、制震ダンパー（地震の揺れを軽減する部品）も見せてもらいました。ボルトを使うために古い木材に穴を開けてしまうことになり、文化財の修理としては異例の手法。これには葛藤があったと、県文化財保存事務所の修理担当者は語りました。その是非の判断は後世（次の修復の200～300年後）に委ねられることとなります。

こうした、さまざまな努力によって奈良の宝（文化財）は守られてきました。

（1）それでは、タモリさんも奈良の宝を守るため一役かった痕跡が残る生駒市にあるお寺とはどこでしょう。次から選んでください。

長福寺 竹林寺 長弓寺 圓證寺 円福寺



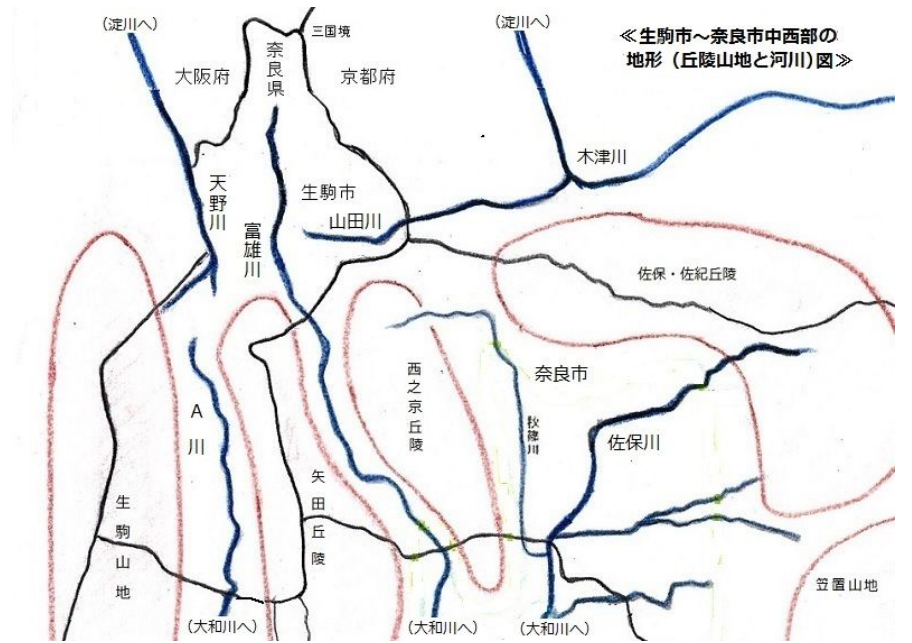
（2）また、このお寺の修理工事中に、極楽浄土に住み美しい仏の声を発するとされる想像上の鳥（鳥の姿をした菩薩ともいえる）が本堂内部の柱に描かれていることが発見され、復元されたのが右上の図ですが、この想像上の鳥の名はなんでしょう。次から選んでください。

鳳凰ほうおう 朱雀すじゃく 迦楼羅天かるらてん 迦陵頻迦かりょうびんが

## ＜問20＞ 生駒の川は神話や伝説、伝承に彩られている

次の文のAにあてはまる語句（漢字2字）は何でしょう。

右上の「生駒市～奈良市中西部の地形概念図」で示されているように、生駒市内を源とする川は4つあります。山田川、天野川、富雄川、A川で、いずれも神話や伝説、伝承に彩られています。



さて、山田川の源流域には昔は鹿がたくさん生息しており、そこに成立した集落は鹿畑（しかはた）と呼ばれるようになりました。その鹿畑の最も見晴しのよい場所に素盞鳴（すさのみ）のお神社が鎮座しています。この神社の祭神は本殿に祀まられている素盞鳴命（すさのみこと）のおのみことで、撰社（祭神と縁の深い神を祀った社やしろ）には素盞鳴命の子孫たる大国主命（おおくにぬしのみこと）が祀られ、撰社に次ぐ格式の末社には天照大神、八幡神（は）たのかみ/はちまんしん、春日明神（かすがみょうじん）（春日大社から迎えた神）などの諸神が祀られています。この神社に残された記録では、この地の鹿が、鹿を神使とする春日大社に奉納されたことが記されています。奈良では、春日大社を含む奈良公園とその隣接市街地という都市部で野生の動物（鹿）と人間とが共存しています。それは世界的にも貴重なことで、都市部で人間と共存する野生の鹿は奈良のシンボルとなっていますが、そのルーツは山田川源流域にあると伝えられています。

天野川の名は、古代に流域が甘くおいしい米が実る肥沃な野という意味で甘野（あまの）と呼ばれていたことに由来して甘野川とされていたのが、いつしか天野川（天の川）と呼ばれるようになりました。天野川は、白く輝く川砂と澄んだ流れが夜空の天の川を思わせることから、何時しか流域では七夕伝説が生まれたことは良く知られている通りであり、また、星の森の泉から流れ出す水が天の（野）川となったという言い伝えもあり、天空のロマンを感じさせる川です。また、かつて天野川上流の田原の里は桃源郷のごとくであったことは＜問18＞で述べられている通りです。

富雄川（とみおがわ）は、昔、トミ（富・鳥見・登美・登弥・等彌・迹見などいろんな字が充てられてきました/鵝トビから変化したともいわれています）と呼ばれた地域を流れたので「とみおがわ（鳥見小河・富小川）/とみのおがわ（登美の小河・富の小川）」などと呼ばれていたのが、いつしか富雄川と呼ばれるようになりました。日本書紀では、長髓彦（ながすねひこ）が内つ国うちづくに（生駒山地の東側）をわが国といており、古事記は、長髓彦のことを登美那賀須泥毘古（とみのながすねひこ）・登美毘古（とみひこ）と表記していることから、生駒神話の主人公である登美彦（ながすねひこ）の本拠地は富雄川流域のトミ地域（現在の生駒市上町から奈良市石木町にかけての地域）とされています。

A川は、生駒山地北東麓を源とし、A姫伝承を生みました。A姫はA川流域の山の神霊が秋の草木を染め抜く女神としての神格を持ったものです。A姫は、奈良市中西部を流れる佐保川流域の山の神霊が春の野山を彩る女神としての神格を持った佐保姫と東西・春秋の一对の女神とされています。

西之京丘陵と佐保・佐紀丘陵～笠置山地の間を流れるのが佐保川、生駒山地と矢田丘陵の間を流れるのがA川、両川を取り持つように西之京丘陵と矢田丘陵の間を流れるのが富雄川です。「彦」は元は「日（太陽の子）（ひこ）」といい、すぐれた男子の意です。また、「姫」は元は「日（太陽の女）（ひめ）」といい、すぐれた女子の意です。記紀を読むかぎり、登美彦は独身です。彼は2人の姫にはさまれたかたちとなっています。そんなことはさておき、A姫はNHKニュースウオッチ9のお天気キャラクターの「秋ちゃん」のモチーフとなったことで広く知られるようになりましたが、それではA姫・A川のAにあてはまる語句（漢字2字）をお答えください。



（出典：四季のフリー素材 十五夜）



（出典：フリー素材 季節の図）



〈問18〉 生駒に「桃源郷」があった！

〈解答〉 陶淵明とうえんめい  
 〈解説〉 (1) 問題中の岩船(磐船いづるね神社あり)、天の川(天野川)、同川に沿った街道(磐船街道)、北田原(北田原町)の位置については右の地図をご確認下さい。



なお、生駒市誌は、天の川を「生駒郡北倭やまと村大字南田原なる星森ほしのもりの泉に發し磐船谷を流下して幽溪奇勝を形づくり牧野村枚方町の間に至り淀川に合す。」と説明しています。

(2) 「諸州めぐり南遊紀行」の中で問題文に關係する部分を次に抜粋しました。なお、問題文にとって關係の深い箇所は太字にしました。また、( ) とその内文、ふりがなの多くは引用者によります。

天川あまのかわ(現天野川あまのがわ)の源は、生駒山の下の北より流出ながわいで、田原はらと云う谷を過ぎ、岩船いづるね(現磐船)におち、私市さきいち村の南をへて、枚方町の北へ出て淀川に入る。獅子窟しくつ山より天川を見おろせば、其川そのかわ東西に直すぐにながれ、砂川にて水少く、其の川原白く、ひろく、長くして、恰あたかも天上の銀あまの河の形の如し。扱さてこそ此この川を、天の川とは、名付たれ。われ此所ここより見ざるさきは、只た天の川の流の末ばかりをわたりて、古人の天の川と名づけし意をしらず。凡およそ諸国の川を見しに、かくのごとく白砂のひろく直にして数里(1里=約3.9km)長くつづきたるはいまだ見ず。天川と名付し事、むべなり。岩舟(現磐船)より入いて、おくの谷中七八町おくのたになかしちはちよう(1町=約109m)東に行いかば、谷の内頗すこぶる広し。其中に天川ながる。其の里を田原と云い。川の東を東田原と云い、大和国也。川の西を西田原と云い、河内国也。一澗ひとたにのちにて両国にわかれ、川を境とし名を同おなじくす。此谷このたに水南より北にながれ、又西に転じて、岩舟に出で、ひきよ(低き)所にながれ、天川となる。凡およそ田原と云所いうところ、此外このほかにも多し。宇治の南にも、奈良の東にもあり。皆山間の幽谷の中なる里なり。此田原も、其入口は岩舟のせばき山澗やまたにを過て、其おくは頗すこぶるひろき谷也。恰あたかも陶淵明が桃花源記にけるがごとし。是れより大和歌姫の方に近し。

(3) 桃花源とは、両岸に桃の花の林が続く川を遡ってたどり着いた川の源の山の向こうにあった理想郷のことをいい、「桃花源記」はその物語のことで、理想郷を意味する「桃源郷」という言葉はこの物語に由来します。

なお、桃は古くから中国では「生命の象徴」「不老不死をもたらす果実」とされており、桃源郷とは生命の生まれ出ずる処、不老不死の里というのが元々の意味と考えられます。

(4) 今日の生駒市北田原地区には、「桃源郷のごとしと讃えられた景観の面影」は今も残っており、それは、優れた景観形成のモデルとされています(右写真)。



ヤマ・ムラ・ノラで構成される田園景観(北田原町)  
 昔から人々の暮らしを支えてきた生業の場である農地(ノラ)は平地に広がり、また斜面に沿うようにつくられ、奥山(ヤマ)、居住空間(ムラ)の三つの層が調和して、田園景観をつくっています。  
 (「生駒市景観形成基本計画」より画・文とも一部修正して引用)

また、北田原地区で確認されている「氷河時代の生き証人」と呼ばれる可憐な草花も、「桃源郷のごとしと讃えられた四季折々の美しい草花が咲き誇っていたであろう美しい景観の面影を今に伝えています(「氷河時代の生き証人」については、〈問7〉をご参照ください)。

〈問19〉 仏教芸術(建築・絵画)

〈解答〉 (1) 長福寺 (2) 迦陵頻伽  
 〈解説〉 <1>長福寺の位置は、右の地図をご参照ください。



<2>この世のいかなる音楽よりも美しく高貴な鳴き声(妙音・妙声)を發する迦陵頻伽(迦陵頻伽とも表記)は妙音鳥・妙声鳥ともいわれますが、發している美しい仏(如来)の声は、「若空無我常楽我浄」(Nya-ku mu-ga jo-raku ga-jo)の意を伝えています。

「若空無我常楽我浄」の意：空そら(雲があれば存在しているとわかるが、雲がないと存在しているとわからない。つまり、他者があってこそ存在し、自身だけでは存在し得ないもの/大乘仏教ではそのようなものを空くうと呼んだ)の若ごとく人間も無我

(他者との關係では存在しているが、己自身だけでは存在し得ないもの)であることを知れ。さすれば、永遠の真理(縁起の法)が得られて苦悩を超越でき、常(常なる精神の平和)・楽(真の安楽)・我(他者に生かされ他者を生かす我執に囚われない自己)・浄(煩悩を離れた清浄な世界)の境地(涅槃ねはん=極楽浄土)を得る。

〈問20〉 生駒の川は神話や伝説、伝承に彩られている

〈解答〉 竜田(龍田)

〈解説〉 (1) 記紀では、「国譲り」によって天照大神が大国主命の上位におかれ、天照大神に従う神々が天津神あまつかみ、素盞鳴命を含む大国主命ゆかりの神々が天津神より格下の国津神くにつかみとされたとなっていますが、素盞鳴神社ではその格が逆転しています。これは、大国主命が主人公の出雲神話や6代目の大国主命(これは固有名詞ではなく、称号のようなもの)とも云われる長髓彦(登美彦)が主人公の生駒の神話の国譲りの真意は、形では国を譲った者こそが上位に立つというものであったことを裏付けています(生駒の神話については、〈問14〉をご参照下さい)。

(2) 天野川源流には住吉神社があります。住吉はもとはスミノエと読み、ここは、生駒が島や半島だったときには「澄んだ入り江」であったと思われます。この神社は次のような数多くの由緒を持ちます。この地に弘法大師が掘った龍ヶ淵りゅうがふちという池が天の川の水源となった。この地はかつて木々に覆われて星の森の泉と名づけられており、天の川の水源地であった。ここは饒速日尊にぎはやひのみことが降臨したのち遷うつた地とされる白庭山はくいていざんの候補地の1つである。住吉神社の別名を「おまつの宮」というが、その由縁は、饒速日尊を祀る磐船神社の黒松をもらい受けて星の森に植樹したところ境内に松の木が鬱蒼と生え繁ったこと、菅原道真公が九州太宰府に追われる身となりひそかにこの神社でその妻と待ち合い暫しばしのわかれを惜しんだことである。

(3) 山田川源流域にある鹿畑の素盞鳴神社の東約300mに龍王四天(龍王社)が祀られ、天野川には龍ヶ淵伝説があり、富雄川の水源は竜王山という言い伝えがあり、竜田川は名前にずばり竜がついており、生駒では古来、竜(龍)・竜(龍)王が水(雨・川)の神として信仰されてきたことがうかがえます。ちなみに、「千と千尋の神隠し」の登場人物のハク(本名は「ニギハヤミコハクヌシ(饒速水小白主)/英語版では Kohaku River)の正体は白龍で、コハク川という小さい川を司る神とされていますが、宮崎監督は、ハクのキャラクターに「竜(もとは蛇)は水(川)の神」という古代日本の信仰を反映させています。なお、普通、八幡神は武運の神(武神)といわれていますが、生駒市誌には「蛇神の呼称は数多くあり、トビ(トベ)・ナガ(ナガラ)のほかヤアタ(ヤワタ)・ミワ(ミイ)などが、後世になって混在したことも考えられる。長髓彦の名も、スネが長いというのが本来ではなくて、長=ナガ=蛇神の呼称であり、したがって古事記の登美(トミ・トビ)彦の名のほうが原型であったとおもわれる。」などあることから、鹿畑の素盞鳴神社で祀られている八幡神も、もとは「ヤアタ(ヤワタ)の神=蛇神」であったと思われます。

(4) 花見には稲作農耕の豊穰をもたらす桜の霊力への信仰(弥生文化)があり、秋の紅葉狩りもみじがりには山や狩猟文化との深い関わり(縄文文化)がある、とされていますが、それが佐保姫・竜田姫への尊慕の背景にあります。